

長田高校の50年を振り返る!?

長田高校25回生 溝口 繁美

皆さんこんにちは。長田高校25回生の溝口と申します。私がいかなる所に登場していいものかと、若干不安なのですが、何か書けと言われたものですから、断れずに思いつくまを書き書いてみたいと思います。しょうもない話になるかも知れませんが、ご容赦ください。

改めて考え、驚いたのですが、私達25回生が長田高校に入学したのは、今からちょうど50年前。沖縄がアメリカから日本に返還された年でした。1年生の時に、50周年を祝う記念品として、30cmの定規と風呂敷(スクールカラーの緑)が配られたのを覚えていています。



50周年記念品～定規と風呂敷～

1 50周年の長田高等学校―生徒として

遡ること50年前は、もちろん校舎も古いもので、今の東門が正門で、その目の前に本館があり、その向こうに北校舎と特別教室が入る南館とが並行して建っていました。北校舎は、壁がコールタールで黒く塗られており、戦争中に爆撃機から見にくくする目的で塗られたのだと教えられました。中庭にはベンチが置かれていましたが、25回生の仲間がバドミントン同好会を立ち上げ、実績を積み中で部に昇格させると、バドミントンコートとして整備されました。多くの生徒が利用していた山陽電鉄は、まだ地上を走り長田の駅の東側では、市電と交差していました。

今では歴史上の話になってしまいましたが、安保闘争や大学紛争、そしてその煽りを受けての高校紛争が、激しく行われていました。私達は、それらが一段落した後の入学生でした。長田高校でも「紛争」があり、それまでのやり方が随分変更されました。定期考査ごとに成績順に生徒の氏名が職員

室前に張り出されていたのが廃止になり、実力考査もなくなっていました。制靴・制帽は自由化され、制服をどうするかが残る課題でした。全校集会は、生



学生の頃の溝口さん

徒会主催であり、学校長といえども、生徒会の了承なしに話をすることは出来ませんでした。集会では、各クラスの委員長・副委員長が出席簿をもって出席を取っていました。その代わり、生徒のやりたい放題という面もあり、中庭には配付されたプリントが紙飛行機にされて落ちて積もっていたり、校内映画会でも映像画面に紙飛行機が飛んで行ったりしていました。世の中が騒然としていた中で、長田高校もそれらと無縁でなかったということかと思っています。

でも、大筋では生徒と教師の関係は良好で、双方が授業にも部活にも力を注いでいました。個性的な先生が多く、芸術も音・美・書の3科目あり、いずれの担当教諭も、独特のパーソナリティーと実力の持主で人気がありました。選択科目もありましたが、基本的な教科科目は全員が学ぶということで授業が行われました。一応文系の私も、物理、化学、生物に加え地学も勉強しましたし、数学も数Ⅲまでやりました。私達の学年からは、前の学年まであった理系の男子クラスがなくなり、3年生まで、全学級で男女が席を並べて勉強しました。修学旅行も、それまでは九州へ行っていたのですが、3か所ほど先生から提案のあった候補地から、生徒の投票により一つを選び、その結果、行き先が信州へと変更になりました。当時は、自然に対する興味関心が非常に高まっていた、修学旅行の影響もあったのか、信州大学や北海道大学、さらには琉球大学へ進学した者がいました。大学と言えば、進路指導も今のように偏差値重視の厳密なものでは

なく、自身の希望優先でしたから、我が回生は身の程知らずに大阪大学を大量受験し、見事不合格、大量の浪人生が出ました。しかし、一浪後はこれも見事に合格を勝ち取り、あの頃の数字ではかなり飛び抜けた合格者数になっていたと思います。浪人して頑張ったと言え、国語が苦手という友人が、浪人中に岩波新書を全部読んだことを自信にして、一橋大学に合格していききました。LHRでは校外に遊びに行くことも多く、長田神社の境内でよく鬼ごっこをやりました。一方真剣な討論をすることも多く、部落差別を巡って、何度も真剣な議論をしたことを覚えています。また、女子の諸君が男女同権の考え方から、男子も家庭科の授業を受けるように求める署名活動をやっていました。私は署名しませんでした、割合他の男子は署名に応じていたように思います。

2 60～70周年頃の長田高等学校―教員として

大学を卒業して兵庫県の高等学校国語科教員として勤めていた私は、縁あって2校目の勤務校として長田高校に勤めることとなりました。高校卒業後10年ぶりに身近に接した長田高校は、我々の高校時代とは随分違って、生徒も真面目で良く勉強しますし、部活動等も熱心で好成績を挙げていました。我々が2年生の時の生徒総会で可決した「制服自由化」は引き継がれ、「標準服」として定められていましたが、殆どが日常的にその標準服を着ており、私服登校の生徒はごく少数でした。また、我々の高校時代に女子生徒が署名活動した、家庭科男女必修が実現し、男子も女子も仲良く家庭科の授業を受けていました。

そうした中、教員の中では、今までの自由で生徒の自主性を尊重した指導が続けていくのか、優秀で真面目な生徒たちをもっと鍛え指導することで、今まで以上の成長を促すのかの議論がされるようになっていました。具

体的には、早期の進路選択と実力考査等の実施による学力向上を目指すのか否かという議論でした。それは比喩的に言う、三男坊として(三中)の自由気ままな生き方を貫くのか、立派な長男(一中)の後を追いかけて追い越そうとするのかという議論でした。

確かに、我々が長田高校に入学したころは、西代中学、飛松中学、鷹取中学の3校で、募集定員の半数以上を占めていて、私は飛松中学校に居りましたが、「なんでわざわざ長田へ」と運動会で運動場を借りていた須磨高校へ進学する優秀な生徒もいましたし、高専を選択肢として進学する生徒もありました。それが、教師として戻ってみると、入学してくる生徒の中学校数は40に近く、飛松中学校出身の生徒が、「僕ら阿呆やから」とつぶやくのを聞いて、「何言うてんねん。俺も飛中や」と励ましたのを(自分を出したのは、却って逆効果だったかもしれない)覚えています。そうした優秀な生徒をどうするかという議論が盛んにおこなわれた結果、その後の方向性というのが決まって行ったように思います。

当時の生徒の状況を3人の生徒の例を引いて紹介したいと思います。いずれも私が担任したのですが、一人は、吹奏楽部の部長でした。真面目で勉強も良く出来る君でしたが、自身の練習に励み、部としてのまとまりを作りコンクールでの好成績を目指す活動の充実を目指す毎日、あまり勉強はできていませんでした。それで、3年生最初の三者懇談で、私が「阪大か京大を目標に頑張ったらどうや」と申しますと「神戸大学に行けたらいいです」という返事でした。それが、最後の文化祭以後勉強に集中しだすと、ぐんぐんと成績が伸び、阪大は充分視野に京大も思っていましたら、秋には学内の成績上位に名を連ね、最終的には東大へ現役合格を果たしました。

二人目は、これも夏休みまでは通常の大学進学を言っていたのですが、突然絵が描きたいと言い出し、当時その方面では最難関と言われていた、京都市立芸術大学へ



教員の頃の溝口さん(右から2人目)